

菅原遺跡

— 平城京西方の円堂遺構 —

編集・発行 公益財団法人元興寺文化財研究所

協力 三都住建株式会社 安西工業株式会社

株式会社文化財サービス

2021

はじめに

2020年12月、古都平城京の西方、奈良市^{みきた}足田町で、非常に特殊な古代の寺院関係遺跡が発見されました。

この遺跡は平城京の西側の高台にあり、そこから東に平城宮大極殿、はるか若草山のふもとに東大寺、そして、丘陵のすそには、東大寺の大仏造立を指揮した名僧、行基菩薩が亡くなった^{きこうじ}喜光寺がのぞめます。

さらに南には唐の国から来日した^{がんにん}鑑真和上が開いた唐招提寺、天武天皇の発願で、行基もかつて修行した薬師寺があり、かつての平城京とその寺院が一望できます。さらに西へ目を転じれば、長屋王や行基の墓所がある生駒山系の山並みが遠くに見えます。

菅原遺跡は平城京の東西道路の一つ、二条条間南小路とよばれる道路の延長上にあります。この二条条間南小路をまっすぐ東へ進んだ、ちょうど平城京の反対側には、東大寺大仏殿があります。

昭和56年(1981)、今回の調査地の南側で奈良大学により発掘調査が行われ、仏堂と考えられる建物基壇が見つかり、奈良時代の寺院が存在したことが明らかになっています。

図1 遺跡の位置

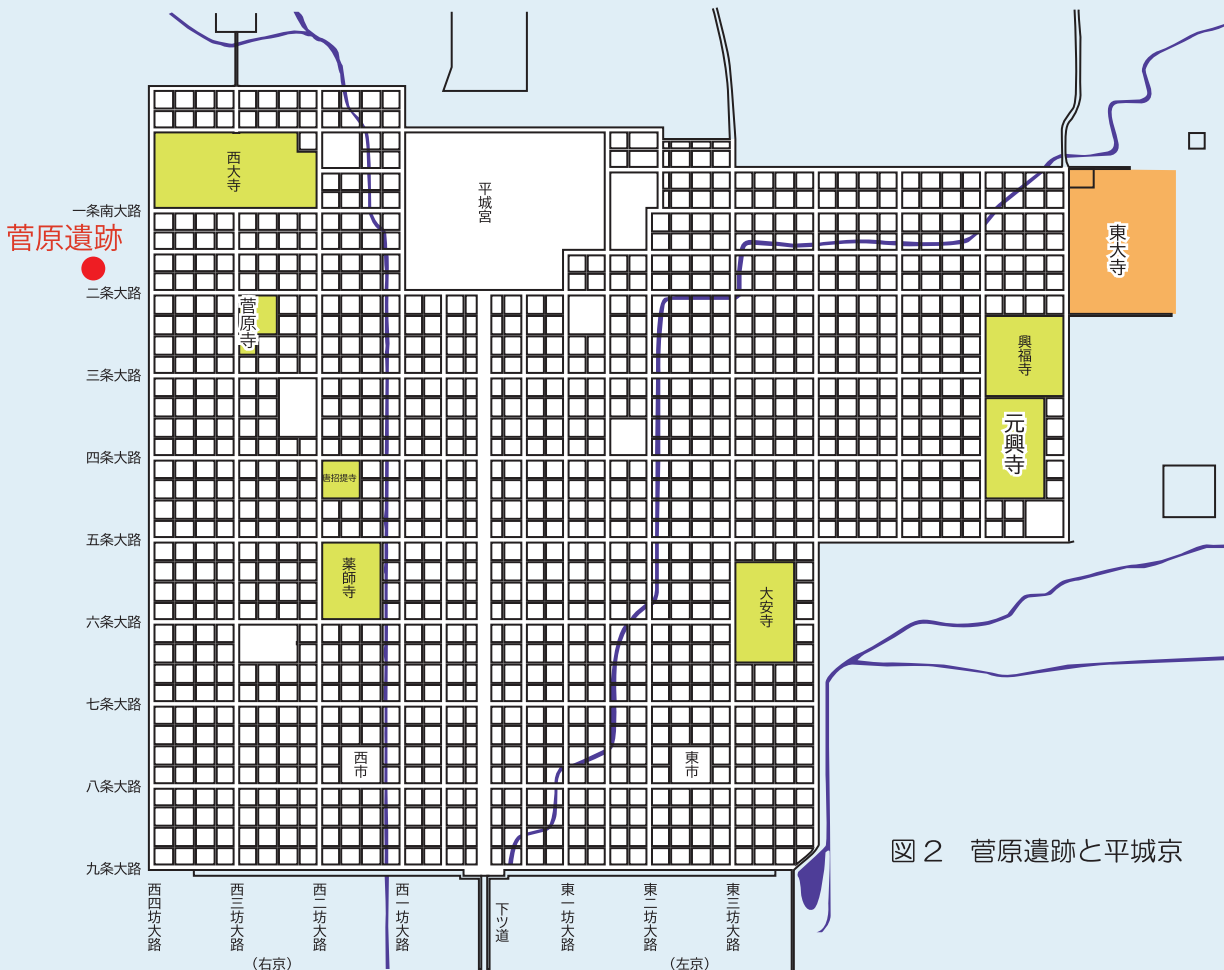


図2 菅原遺跡と平城京



図3 菅原遺跡遺構平面略図 (S=1/400)

発見遺構について

発見されたのは大規模な回廊^{かいろう}と呼ばれる廊下で取り囲まれた区画と、その中心に配置される建物です。

回廊は80～100cm四方の正方形の柱穴で構成されます。単廊^{たんろう}と呼ばれる対面通行構造の回廊と推定されますが、東・南面は斜面の崩壊によって失われています。北面東半分は回廊ではなく、塀となっており、東面全面と、南面東半分も塀であった可能性が高いと考えられます。南面西半が回廊型式であった場合、回廊中心間の推定距離は南北38.5m、東西内法は36.4mを測ります。

南面および東面には雨落ち溝と思われる溝が伴います。南面柱列雨落ち溝からは多数の瓦が出土しており、中には奈良時代中期(750年前後)の軒平瓦^{のきひら}が含まれます。

回廊北面には東西五間、南北二間の建物を取り付きます。形状からお堂であったと考えられます。

中心建物は推定16基の柱穴が円形に取り巻くもので、内側には石材を抜き取ったと考えられる不整形な穴が巡ります。



写真1 回廊の柱復元(西から)



写真2 中央建物(北東から)

建物構造と年代

中心建物は柱穴が円形に並ぶ類例のないものです。どのような構造であったのか、復元が非常に難しいのですが、現在のところ、円形の多宝塔を想定する案が有力です。敦煌莫高窟の壁画には円形の仏塔が描かれており、こうした中国の情報をもとに作られた建物かもしれません。

ただし、円形基壇の上に八角堂を置く案や、インドのストゥパーのような土饅頭構造の周りを柵で囲っていた、という案もでており、上部構造についてはなお検討の余地があります。

これらの建物の年代についてですが、南面柱列雨落ち溝から745～757年に位置付けられる軒平瓦が出土しました。また北面回廊柱穴掘方から8世紀半ばに相当する土師器^{はじきつき}坏が出土しています。これらのことから8世紀半ばに創建年代を位置付けることができます。

遺跡の性格について

さて、今回見つかった遺跡の性格ですが、資料整理前であり、整理作業が進むことで評価が変わる可能性もありますが、大まかな見通しを述べておきます。

これらの遺構が、離宮や貴族の別荘に関連する遺構である可能性は、その規模や立地から極めて低いと思われます。先に見たように、南側隣接地における1981年の調査で瓦葺・風鐸^{かわらぶき ふうたく}を持つ建物基壇が発見されており、当遺跡はこれらと一体の山林寺院と考えることが適当と考えられます。

中心建物の構造は明確ではありませんが、多宝塔や八角円堂などの円堂建築であることは間違いのないと思われます。円堂建築については美術史、建築史双方の先行研究により個人を供養する供養堂の機能が指摘されています。

平城京の西にはいくつかの寺院があった記録がありますが、8世紀半ばに供養堂を建立し、供養される人物としては749年に亡くなった行基菩薩がその候補の筆頭として挙げられます。行基はいうまでもなく、東大寺の大仏^{ぎょうきねんぶ}建立に業績のあった高僧ですが、その業績を記した『行基年譜』には、行基が建立した多くの寺院の中に「長岡院^{なが}」という寺院が菅原寺の西の岡にあったと記されます。菅原寺は現在の喜光寺の事ですので、位置関係も合致します。1981年の発掘調査では発見遺構を長岡院に比定しており、これは現在でも概ね肯定されています。

おわりに

今回の調査の成果をまとめると、丘陵上の大規模な宗教施設を確認したこと、そしてその回廊をほぼ全周確認できたこと、また類例のない構造の中心建物を検出したこと、その創建年代を750年前後と特定できたことがあげられます。そして判明した事実から、一つの可能性として中心建物が行基の供養堂であった可能性が指摘できます。ただし、墨書土器や木簡といった、長岡院であることを直接示す遺物や、仏具など直接寺院関係の遺構であることを示す遺物が無い、といった点が課題として残されています。



図4 菅原遺跡推定復元（多宝塔形式で復元）